

SP レコードを受け継ぎ活用するということ —— 全国所蔵機関調査をもとに ——

大久保 真利子¹⁾・三島 美佐子²⁾・柳 知明³⁾

¹⁾九州大学総合研究博物館・専門研究員

²⁾九州大学総合研究博物館・一次資料研究系

³⁾元大阪芸術大学博物館事務室事務長・学芸員

要旨：本稿は、日本初となる全国的な SP レコード所蔵機関調査をもとに、SP レコードを所蔵する各機関の実情や課題を明らかにするとともに、九州大学総合研究博物館が所蔵する約4万枚の SP レコードコレクションの特徴について述べるものである。また国内の SP レコードをめぐる今後の活動展開についても言及し、所蔵機関同士の連携やより積極的な利活用を進めるための方策を提示する。

キーワード：SP レコード，データベース，歴史的音源所蔵機関ネットワーク，蓄音機，田村悟史

はじめに

九州大学総合研究博物館（以下、九大博物館）は、2014年に田村悟史氏旧蔵の SP レコード約4万枚の寄贈を受け、田村作成のデータベースの分析のほか [大久保 2018]、レコードコンサートの開催や所蔵音源を用いた研究などを展開してきた [大島 2018, 京谷 2018, 三島 2018]。

並行して2017年から筆者と九州大学総合研究博物館教授の三島美佐子が、日本国内のいくつかの所蔵機関での現地視察などをおこない、国内における SP レコードの所蔵の現状や利活用の実態について調査をはじめた。また研究会やシンポジウムなどで九大博物館の SP レコードについて紹介することにより、今後の展開について重要な助言をいただくことができた¹⁾。このような活動とおして、国内 SP レコード所蔵機関のいくつかについては実情を知ることができたが、これまで、日本全国に何枚くらいの SP レコードが現存しているか、そして所蔵館はどのような課題を抱えているかなどについて調査したものは確認できず、国内の SP レコードをめぐる状況を網羅的に把握することはできなかつた²⁾。そのような折に、日本屈指の SP レコード所蔵機関である大阪芸術大

学博物館事務長をつとめた柳知明から、国内の SP レコード所蔵機関の一覧について提供を受け、今回全国的なアンケート調査を行うに至った。

そこで本稿では、第1節にてアンケート調査の結果について紹介するとともに、その結果を分析し、日本における SP レコード所蔵館の現状や課題などを明らかにする。そして第2節ではアンケートを実施することによって見えてきた九大博物館の資料の特徴について述べるとともに、第3節では SP レコードをめぐる今後の活動の展開について論じる。なお本稿の一部は、関西圏大学ミュージアム連携活性化事業 Zoom による座談会「近代遺産の発掘と活用 寄贈資料を引き継ぐ～SP レコード～」(2020年11月21日)の発表に基づくものである³⁾。

1 日本国内の SP レコード所蔵調査

本節では、SP レコードの所蔵機関アンケート結果を開示する。

(1) アンケートの概要

アンケートは、Google フォームへの記入もしくはエク

セルフファイルへの書き込みにより回答を得た。回答期間は2020年10月28日から11月11日までとしたが、追加で所蔵情報を得た機関については、その後も順次アンケート調査を行った。

アンケート実施に先立ち、前述の柳から提供を受けた情報をもとに、まず電話にて所蔵の有無について確認をした。その結果、所蔵が確認できたのは54機関であった。電話では所蔵確認とともに、アンケートの趣旨を伝え協力を仰いだ。アンケートはメールで送信したが、一部は郵送での送受信を行なった。ただ現地視察や電話によるヒアリングにより、すでに担当者の連絡先がわかる機関については、メールにて直接依頼をした。その結果39機関から回答を得た（回答率：約72%）。

なお、アンケートは所蔵機関名と所蔵枚数を除いては、回答者名を公表せず、以下のアンケート結果についても、すべて匿名での公表とする。

(2) 所蔵館の概要

SPレコードの所蔵を確認できた全54機関の所蔵機関名と所在地域については、図1のとおりである。所在地域別にみると、関東がもっとも多く（19機関）、次いで近

畿（12機関）、九州・沖縄（9機関）となり、全国に所蔵が散らばっているのがわかる。また機関の種別としては、図書館、博物館、公共施設、財団や企業などがあり、公的機関と民間が混じっている状況にあることもわかった。

(3) アンケート結果

質問の項目については、資料1にまとめた。以下では、項目別に回答を開示・分析し、傾向や課題などを論じる。なお回答のうち選択肢を設けた設問の統計結果については、資料2を参照されたい。自由記述の内容については、本文のなかで適宜紹介する。

〔1. 貴館について〕

ここでは、所蔵機関の正式名称や担当部署、担当者などのほか、連絡先など、各館の基本情報について8項目の質問をした。所蔵機関の正式名称については、図1のとおりである。その他の項目については個人情報を含んでいるため非公開とする。

〔2. 貴館のSPレコードについて〕

ここでは、各機関のレコードの実情について8項目の



図1 SPレコードの所蔵が確認できた54機関

表1 所蔵枚数の統計

所蔵枚数	機関数
4万枚以上	3
1万枚以上 4万枚未満	7
5千枚以上 1万枚未満	5
1千枚以上 5千枚未満	10
500枚以上 1千枚未満	4
100枚以上 500枚未満	7
100枚未満	3

質問をした。

まず2-1では、所蔵枚数の把握状況について質問をした。その結果、すべての回答が「大体把握している」もしくは「完全に把握している」のいずれかで、「少しは把握している」「全く把握していない」という回答は無かった。日本の所蔵機関の大部分は、所蔵するレコードに対し、何らかのアプローチを加えていることわかる。

2-2では所蔵枚数について質問した。各館の所蔵枚数の分布は表1のとおりである。4万枚以上を有する機関が3機関（新冠町レ・コード館、大阪芸術大学博物館、金沢蓄音器館）ある一方で、100枚未満も3機関あり、もっとも少ない機関は65枚であった。そして、本調査によって把握できたSPレコードの総数は、約404,154枚である。ただしアンケートへの回答を得た39機関を対象としたものであり、国内には404,154枚より多くのSPレコードが現存していることが想像できる。また個人コレクターのコレクション受け入れなどによって刻々と変化することも念頭におくべきである。そのほかSPレコードはほとんどが商用品であるため、多くの重複を含んだ所蔵数であることも含みおく必要がある。

次に2-3では、SPレコード以外のレコードの所蔵状況について質問した。SPレコードのみしか所蔵していないのは2機関のみで、LPレコードも所蔵している機関がもっとも多く（35機関）、EPレコード（21機関）や蝋管レコード（13機関）も所蔵している機関が比較的多いことがわかった。また「その他」の回答として、ソノシートを所蔵している回答も5機関あった。

2-4および2-5では、所蔵の来歴について質問した。「特定少数からの寄贈や購入」が半数以上で、「不特定多数からの寄贈や購入」も含めると、87%を占める結果となった。ほとんどの機関が寄贈者や購入先など、コレクションの来歴を具体的に把握しているようだ。

つづく2-6および2-7は、所蔵内容について質問した。所蔵機関の大部分がジャンルを特定しない多ジャンルのコレクションであることがわかるが、多ジャンルであっても、「邦楽」や「クラシック音楽」などのように、おおまかに範囲を限定して収集している機関もあるようだ。

そして2-8では、今後コレクションを拡大する可能性の有無について質問した。購入の予定があるという機関は皆無であったが、「寄贈の内容により受け入れる可能性がある」という機関がもっとも多く（22機関）、「寄贈の申し出があれば受け入れる」「寄贈受け入れの予定がある」という機関もあった。また「その他」の自由回答として、「収蔵内容に沿う特定のジャンルであれば受け入れる」や、「盤の重複の有無を調べてから受け入れる」という機関もあり、無条件でどのような盤でも受け入れる機関は非常に限られていることが明らかとなった。

【3. SPレコードの整理・保管について】

各機関がどのようにSPレコードを整理し、保管しているかを把握するために、ここでは5項目の質問をした。

まず3-1において、盤の置き方について質問した。そうしたところ、縦置きと横置きが拮抗していることが明らかとなった。またどちらか一方に統一しておらず、縦置きと横置き両方との回答も10機関あった。ただ、縦置き・横置きに関わらず、レコードをむき出しのまま保管している機関はみられないようだ（3-2）。

次に、各機関が所蔵するレコードの整理・分類方法について2-4で質問したところ、「受け入れ順」がもっとも多く、次いで「ジャンル別」、「演奏家別」となっていた。その他の意見として、「寄贈者による分類を尊重している」といった意見や、所蔵機関が図書館の場合は「NDCを基準に整理・分類している」という回答もあった。また、盤を保管している場所の環境について3-4にて質問したところ、温度・湿度の管理や遮光を施した場所に保管している機関が多いことも明らかとなった。

整理・保管についての自由記述（3-5）では、他に比べて具体的な質問が多く寄せられた。たとえば、温度や湿度など適切な保管環境を知りたいという意見（4機関）や、ヒビやワレのある盤の保管やクリーニング方法について（3機関）、横置きの場合何枚まで重ねることができるのかといった具体的な質問もあった（2機関）。盤の整理や保管方法についてはきちんとした指針が示されている

るわけではないが、盤は比較的脆く保管が悪いと反りや歪みなどを招くため、正確な知識を共有することが重要であろう⁴。

「4. SP レコードの目録化および公開について」

ここでは、目録化およびその公開について10項目の質問をした。

まず4-1で目録化の有無について質問したところ、「進行中」が46%と最も多く、「完了している」が31%であった。その一方で、目録化の「予定はない」が8%あり、「その他」10%の意見として、「一定の段階まで目録化を行ったが、現在は中断している」という主旨の回答が複数あった。各所蔵機関は寄贈を受け入れるごとにデータ化に取り組むことになると予想される。前述の2-8の結果からも分かるように、どのような盤であっても受け入れるという機関が少ない理由は、SP レコードの保管場所の問題のほかに、データ化に関する手間や時間も障壁となっていると考えられる。この点については、本稿3節でも触れる。

次の4-2から4-6までは、4-1で「予定はない」とした8%（3機関）を除いた、36機関を対象に質問をした。4-2においては、目録化の媒体について複数回答可で質問をしたところ、デジタルデータのみが18機関、紙データが6機関で、デジタルデータと紙データという両方のデータを所有しているという回答が11機関あった。目録化の項目についての質問（4-3）では、「レーベル部分の一部」との答えが25機関と最も多く、全ての情報を記載しているという回答（10機関）を大きく上回った。レーベル内の情報の取捨については、多くの機関が明確な基準を持たずに判断している場合が多いと考えられる。レーベル内に書かれたデータの意味や入力の実価値を広く周知する必要があるだろう。そのほかメタデータ以外のデジタル化についてはあまり積極的ではなく、画像データは8機関、音声データは5機関にとどまることが明らかとなった。そして同じく4-3にて「調査してデータに加えている項目がある」と回答した11機関については、4-4にてその内容を記述してもらった。録音年や発売年を追記している機関が最も多く（8機関）、追記の理由としては、レコードの更なる利活用や、資料としての価値を判断する際に非常に重要な情報と捉えている機関が多いようだ。また盤のコンディション（音質、ワレやカケなどの状態）

や独自の整理番号を追記している機関もあり（各3機関）、管理のための情報も重要なデータだということがわかる。

次に4-5では、データの公開状況について質問したが、「公開している」との回答は31%（11機関）のみで、未公開の機関が圧倒的に多いことが明らかとなった。ただ、「公開はしていないが研究者等から個別の申請によって提供の場合あり」との回答が34%（12機関）あり、すでに目録化している機関であれば研究などへの協力は惜しまない体制にあるようだ。

また4-7、4-8、4-9では、筆者らが構想している「SP レコードのデータベース統合システム」について質問したが、これについては後述する。

以上、SP レコードの目録化とその公開についてみてきたが、メタデータの整備や画像や音声のデジタル化については、専門的な人員や多くの時間を確保できなければ、各機関で完璧に整備するのは大変難しいだろう。またデジタル化が完了したとしても、著作権遵守の観点からひろく公開できないといった事情もある。日本における音源資料のデータ形成について基盤を作るとともに、データ入力の省力化やさらなる利活用をめざした取り組みの必要性については、第3節で詳述する。

「5. SP レコードの活用について」

これまでのアンケートにより、SP レコードを所蔵する機関は、多くの機関ではデータ化をすすめ、資料としてのSP レコードを保存・管理する方策を講じていることが明らかとなった。そこで「5. SP レコードの活用について」では、SP レコードの活用度合いやその方法などについて6項目の質問をした。

まず5-1で活用の有無について質問したところ、「活用している」との回答が54%、「活用していない」、「模索している」が合わせて35%となった。5-2で質問した活用方法については、レコードコンサートが最も多く（24機関）、次いで館内視聴（15機関）や研究活動（10機関）という結果となった。また「その他」としては、展示会の開催との回答が多かった。5-3で活用頻度や内容について質問したところ、たとえばレコードコンサートは不定期との答えが多く、またコロナの影響でレコードコンサートの延期や中止、視聴ブースを閉鎖したなどの回答もあった。また、大学としてSP レコードを所蔵している機関からは、「デジタルネイティブの学生は質感を伴った

アナログな音楽体験から遠ざかる傾向にあり、コロナ禍によってその状況は加速されつつある」といったSPレコードを含む「アナログ音源離れ」がコロナの影響により助長されていることなども明らかとなった⁵。

SPレコードを再生するためには専用の再生機が必要になるが、5-4にてその保有についてたずねたところ、所有率は82%で、7機関を除いた32機関は何らかの再生機を持っていることがあきらかとなった。しかし5-1での回答のとおり「活用している」という回答は54%にとどまっております。再生機を所持していないために活用できないという事例は少ないようだ。

「6. そのほか」

ここではアンケートの総括として、6項目の質問をした。

SPレコードを保管・整理・活用するための人材(6-1)、資金(6-2)、知識(6-3)の充実度について質問した。結果は、いずれも「十分とはいえない」が50%を超える結果となっており、「全く足りていない」という回答もいずれも30%前後であった。多くの所蔵機関が厳しい状況のもと、SPレコードを所蔵していることが確認できた。

また、6-4でSPレコードを所蔵するメリットについての質問については、歴史的な聴覚資料としての側面に価値を見出している機関がもっとも多く、教育機関においては教材、公的機関においては郷土資料のひとつとして捉えている機関が多いという傾向がみられた。一方でSPレコードを所蔵するデメリットについて聞いたところ(6-5)、SPレコードを保管するために多くの所蔵場所が必要であるという回答が最も多く(11機関)、次いで破損などの危険性から取り扱いが難しいなどという答えもあった(7機関)。そのほかSPレコードそのものやその再生装置としての蓄音機の取り扱いやメンテナンスなど、更なる利活用をすすめるための知識の集積やノウハウの継承が難しいといった意見もみられ、現状について危惧する意見も多かった。

そして最後の質問となる6-6では、SPレコードに関する意見、疑問、課題などを自由にお書きいただいた。著作権が障壁となり、レコードコンサートに踏み切れないといった意見のほか、レコード会社の歴史や変遷に関する詳細な情報、作詞・作曲家、演奏家など生没年などについてのデータベース、録音・発売年月日など、SPレ

コードを利活用する際に必要となる資料の作成と公開を望む声が多く見受けられた。またSPレコード所蔵館同士の連携を望む声も多く、「他館がどのような活動をしているか知りたい」という意見も寄せられた。

2 九大博物館のSPレコードコレクションの特徴

これまでみてきたように全国的なSPレコードの所蔵調査から、日本におけるSPレコード所蔵機関の現状や特徴を知ることができた。九大博物館が所蔵するSPレコードの来歴については[三島 2018]、田村作成のデータベースからわかるコレクションの特徴については[大久保 2018]ですでに示したが、ここからはアンケート結果と対照することにより明らかとなった。九州大学総合研究博物館のコレクションの特徴について述べていく。

(1) コレクション概要

まず所蔵数であるが、九大博物館は約4万枚のSPレコードを所蔵しているため、表1では「1万枚以上4万枚未満」の枠に位置する。アンケート調査に協力いただいた39機関を対象とした統計によると国内第4位の所蔵数となり、国内でも指折りの所蔵数を誇るようになった。

九大博物館のSPレコードは、田村悟史氏旧蔵で日本音楽・西洋音楽を含めた多ジャンルのコレクションであるため、2-5では「特定少数からの寄贈や購入」、2-6では「複数のジャンル」となり、国内の多くの所蔵機関と同様の傾向がみられる。

また盤の保管状況であるが、一部のみ温度・湿度を管理した部屋にて、段ボールに詰めて横置きで保管している。ただ一つの段ボールに最大50枚くらいの盤を入れていたため、取り出す際の盤への衝撃を軽減するためにも、今後改善する予定である。

次に目録化についてであるが、[大久保 2018]でも述べたとおり旧蔵者の田村作成によるデジタルデータベースがすでに存在する。しかしデータの不正確さやジャンルごとの設定項目が異なるなどの問題が解決できていないことから、データベースの公開には至っていない。当面はレーベル面を中心とした盤面の画像データとメタ

データの公開を目指す、音源のデジタル化については専用機材の調達も含め、今後の課題となりそうだ。もしメタデータを公開しても、音源については4-5で多くの意見が寄せられたように、研究者等から個別の申請があった場合には提供を検討する状況である。実際これまでも、レコードを研究に使用したいという専門家からの問い合わせもあり、その都度調査結果をお知らせするという対応をおこなっている。そのほか利活用については、所蔵する3台の大型蓄音機を用いて年に数回レコードコンサートを催していたが、コロナの影響で2020～2021年は全く開催できていない。

また「6. そのほか」で質問した人材、資金、知識については、いずれも十分とはいえないが、筆者がSPレコードをプロパーとする専門研究員として在籍し、これまでの人脈からさまざまな方に教を請う環境にあることから、知識という面においては恵まれている状況であろう。

(2) 収蔵品の特徴

アンケートには現れてこない九大博物館コレクションの特徴としては、SPレコードの本体（盤）だけでなく、スリーブと言われるレコード袋や歌詞カード、アルバムの箱などといった付随資料も所蔵していることも、特徴のひとつである。

現在レコード盤は、無地のスリーブに入れ替えられているが、当時はレコード会社独自のスリーブに入れられ発売されていた（図2参照）。このようなオリジナルのスリーブがレコード会社別・デザイン別に選別されており、63箱収蔵されている⁶。また歌詞カード（図3）について



図2 オリジナルのスリーブ

は、田村が付けたジャンル分類番号ごとに袋に入れて保管されており、貴重な資料群となっている。今後整備するデータベースには盤と付属品を紐付け、近代における音源資料の実態を示すものとして公開していきたいと考えている。

(3) 旧蔵者の足跡

またそのほかの特徴として、旧蔵者田村悟史がどのようにSPレコードを活用したかがわかる足跡が残されていることが挙げられる。たとえば前述のように、現在盤は無地のスリーブに入れ替え保管されているが、その表面には田村による整理番号やレーベル面の簡単な記述のほか、田村による盤の評価や活用に関する田村独自の記述もある。たとえば図4でみると、左側がA面、右



図3 歌詞カード

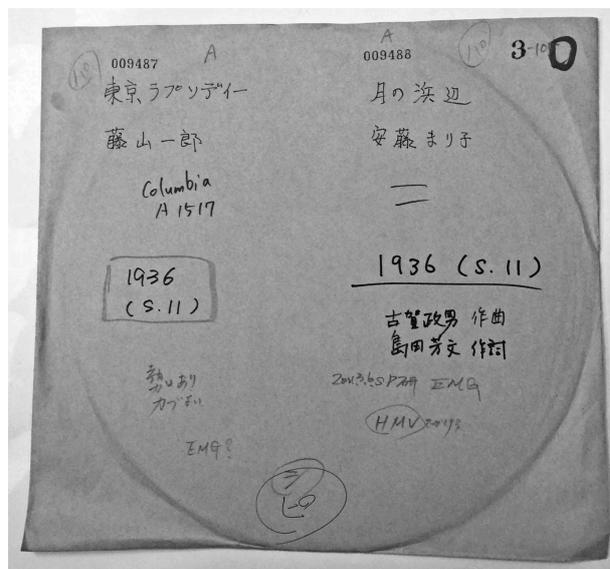


図4 田村による書き込み入りのスリーブ

側がB面に関する記述で、左側にあるA面においては、上から「A / 009487 / 東京ラプソディー / 藤山一郎 / Columbia / A1517 / 1936 / (S.11) / 勢いあり / カづよい / EMG ?」(下線は筆者による)とある。これらの書き込みのうち、最初の二つの記述(A / 009487)は田村による盤の評価と整理番号で、そのあとがレーベルデータである。また下線部については、田村が主催した「SPレコード研究会」でこの盤を使用した証で、「勢いあり / カづよい」については、音源に対する田村の評価であり、「EMG ?」は使用する蓄音機について記述だと思われる⁸。今回、他機関へのヒアリングやアンケート調査などから、スリーブの書き込みは他機関よりも明らかに多いことが明らかとなった。そのほか旧蔵者の田村の活用実態を示すものとして、「SPレコード研究会」のチラシ、解説のために田村が収集・整理した紙資料、「SPレコード研究会」時の録音なども残っている。これらは今後整備するデータベースにも反映し、旧蔵者である田村の足跡を残していきたいと考えている。

3 SPレコードめぐる今後の展開

これまで、全国的な所蔵機関アンケートの結果とその分析を提示し、九大博物館コレクションの特徴を述べてきた。最後に本節では、所蔵館アンケートや九大博物館の現状を踏まえて国内のSPレコードをめぐる今後の展開についての必要性や可能性を提示し、SPレコードを後世に受け継ぎ、そしてより積極的に利活用するための方策について考える。

(1) SPレコードのデータベース統合システムについて

現在SPレコードそのものの音を聴く機会は非常に限られている。要因のひとつには、SP盤は針を落として再生すればするほど音質が劣化するという、盤そのものの物質的特徴がある。そのほかの要因として、実際に聴きたいと思っても、どの機関にどのような盤が所蔵されているかを把握するのが相当難しいという点が挙げられる。このような現状に鑑み筆者は以前より、SPレコードのさらなる利活用を進めるためには、より多くの機関が所蔵データベースを作成し、音源なども含めた情報を公開し、研究者や好事家がSPレコードを気軽に利活用できる環

境作りが必要だと考えていた。そしてできれば各所蔵機関がそれぞれのフォーマットでデータを公開するのではなく、全ての所蔵館が共通の項目でデータベースを作成し公開することが望まれる。また、SPレコードの多くは商用品であることから全く同じ盤がいくつも存在するため、同定するシステムの構築ができれば、他機関が入力したものについては所蔵の有無を入力するだけでよく、データ入力の作業負担を軽くすることができると考えている。

そこでアンケートの4-7にて、「SPレコードのデータ項目を統一するとともにデータ入力の省力化を目指して「SPレコードのデータベース統合システム」の可能性を模索しています。そのシステムに関心はありますか？」との質問をした。その結果、「非常に関心がある」「やや関心がある」を合わせると60%を超え、多くの機関が多少なりとも関心をもっていることが明らかとなった。その理由についてであるが(4-8)、データ入力を進行中の機関からは、たとえばマトリクス番号による盤の同定によりデータ入力の省力化を期待する意見が多かった。またその他の意見としては、たとえば録音年月日や演奏者をはじめとした生没年など、レーベルに記載されておらず新たに調査を加えなければ得られないデータを欲しているという意見も多かった。

その一方で「あまり関心がない」「まったく感心がない」と答えた約30%の機関について見てみると、すでに目録化している機関からの回答が多いという傾向があり、回答の理由としては、「統一項目に移行する手間をかけられない」という意見が多く見受けられた(4-9)。事実、先のアンケート結果からも分かるように、SPレコードをはじめとしたアナログ音源の利活用頻度が減るなかで、SPレコードのデータ化に新たに割く時間は極めて限られていることが想像できる。今後、データベース統合システムを実現するためには、なるべく各所蔵機関の負担にならない形での実現を目指すとともに、その意義についても多方面から議論し発信していく必要があるだろう。

またアンケート内で多くの要望があったように、とくにSPレコードを利活用するための付随情報については、SPレコードのポータルサイトの構築によって実現できればと考えている。同サイトには、これまで本稿で対象としてきた、各所蔵機関の「所蔵目録」だけでなく、ジャンル別・レコード会社別で研究が進められてきた「発売

目録」をも集約することができれば、日本における SP レコードをはじめとした歴史的音源の全体像により深く迫ることができるだろう。また、将来的にはレコード会社の協力を得ることにより、たとえばアメリカのカリフォルニア大学サンタバーバラ校 (UCSB) の図書館が運営する SP レコードに関するポータルサイト DAHR (Discography of American Historical Recordings) のように、各レコードのテイク数なども記載することが可能となる。このような充実したレコードデータベースを作成し、日本における SP レコードの歴史や特性を全世界に公開することで、魅力ある歴史的な音源資料として後世に引き継ぐことができるのではないだろうか。

(2) あらたな仕組みづくりに向けて

SP レコードを後世にまで受け継ぐためには、適切に保管・管理するばかりでなく、利活用しながらその魅力発信に努めることが求められるが、それは決して容易なことではない。アンケートにおいてデメリットとして挙げられたように、SP レコードの保管には大変多くの場所が必要なうえに、SP レコードそのものが重たく破損の恐れがあるなど、扱いに苦慮しているという意見も多い。このような問題の根幹には、取り扱いや保管方法、メンテナンスなどに関するマニュアルや明確な基準が定められていないことが指摘できる。今後は、所蔵館同士の連携によって知恵や知識などを共有しながら、日本全体で SP レコードを後世に受け継ぎ更なる利活用を推進するという取り組みが必要ではないだろうか。

以上のような課題解決に取り組むためには、組織的に取り組んでいくことが最も有効であろう。そこで、所蔵館アンケートを実施するきっかけともなった2020年11月の「関西圏大学ミュージアム連携活性化事業」の関係者を中心に幾人かの賛同者を得て、2021年4月に「歴史的音源所蔵機関ネットワーク」(愛称:レキレコ)を発足し、現在活動方針などを話し合っている。「歴史的音源所蔵機関ネットワーク」では、所蔵館同士の情報交換や音源資料に関する最新情報の共有、活用事例の報告や研究発表、そして日本における SP レコードに関するポータルサイトの設置などを実現していきたいと考えている。

おわりに

現地視察やアンケート調査をとおして、SP レコードを所蔵する各機関の工夫や熱意を感じる一方で、ごく少数ではあるが、SP レコードは活用頻度の低い厄介な資料だという意見も見受けられた。利用者の減少やデジタル音源に慣れた世代を感じる再生の不便さなどを考えると、各機関が個別で利活用の用途を模索するのはすでに限界がきていると考える。各機関の特徴や知恵や工夫を集積するとともに、今後は「歴史的音源所蔵機関ネットワーク」での活動を軌道にのせ、日本国内に現存する SP レコードをより良い状態で後世に引き継ぎ、更なる利活用を推進したいと考えている。

今回、日本国内の SP レコード所蔵機関については、くまなく調査したつもりではあるが、このほかにも SP レコードを所蔵している機関があれば、ぜひご一報いただきたい。

謝辞

本稿執筆にあたりまして、現地視察、電話でのヒアリング、そしてアンケート調査などにご協力いただきました多くの所蔵機関のご担当者さまに対しまして、深く感謝の意を表します。

注

- 1 たとえば大久保による発表に、「九州大学総合研究博物館 SP レコードコレクションについて」(日本アートマネジメント学会九州部会・文化経済学会<日本>九州部会連携による研究発表会、2018年3月10日、佐賀大学有田キャンパス)や、「九州大学総合研究博物館 SP レコードコレクションについて」(シンポジウム「近代の音と声のアーカイブズ——種々のメディア領域での取組と熊本におけるこれからの展望——」, 2019年9月17日、熊本大学)がある。
- 2 過去の所蔵館などの調査には、[久保田 2006] や [財団法人日本伝統文化振興財団 2010] があるが、全国的に知名度のある所蔵数の多い機関を対象にしており、本稿のような網羅的な調査ではない。
- 3 大久保真利子「SP レコードを受け継ぎ活用するということ——所蔵館調査と九州大学総合研究博物館での取り組みをもとに——」
- 4 レコード研究家でボン大学招聘研究員の毛利眞人氏が、SP レコードの扱い方や盤面データの意味についてまとめた著書の刊行を予定している(『SP レコード・ガイドブック—レコー

- ド学のすすめ (仮)』東京：スタイルノート).
- 5 コロナ禍におけるSPレコードを用いた新たな活動展開としては、たとえばジャズ関連レコードを所蔵している東京大学総合研究博物館がデジタル配信による「蓄音機音楽会」を開催するなどの取り組みも見られる。
 - 6 スリーブの図像学については〔京谷 2018〕参照。
 - 7 「009487」は、田村独自の整理番号の一部で、正式には「SP03009487」である。
 - 8 九大博物館には大型蓄音機を3台所有しているが、そのうちの1台が「E.M.Gienn エキスパート・シニア」である。

参考文献

- 大久保真利子「田村悟史作成のSPレコードデータベース——その特徴と公開に向けての課題——」『九州大学総合研究博物館研究報告』第15・16合併号：35-43, 2018年。
- 大島久雄「赤坂小梅と筑豊炭坑文化——新民謡の地域性——」『九州大学総合研究博物館研究報告』第15・16合併号：

45-55, 2018年。

- 京谷啓徳「レコード袋の図像学——SP盤周辺のデザインをめぐるノート——」『九州大学総合研究博物館研究報告』第15・16合併号：57-64, 2018年。
- 久保田敏子(研究代表者)『日本伝統音楽に関する歴史的音源の発掘と資料化』(日本伝統音楽資料集成第6巻, 平成16・17年度共同研究資料集), 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター, 2006年。
- 財団法人日本伝統文化振興財団『日本の基礎音楽資料としてのSP盤の実態に関する調査研究』(文化庁委託業務「音楽情報・資料の収集及び活用に関する調査研究」報告書), 2010年。
- 三島美佐子「田村悟史コレクションの受け入れ経緯およびコレクション概要」『九州大学総合研究博物館研究報告』第15・16合併号：31-34, 2018年。

Received Dec. 28, 2021; accepted Jan. 20, 2022

(資料1)

SP レコードに関するアンケート 質問一覧

1 貴館について

- 1-1 貴館の名称
- 1-2 担当部署
- 1-3 担当者名もしくは記入者名
- 1-4 フリガナ
- 1-5 役職・肩書き
- 1-6 住所
- 1-7 電話番号
- 1-8 メールアドレス

2 貴館のSPレコードについて

- 2-1 貴館が所蔵するSPレコードの所蔵枚数の把握状況について教えてください。
完全に把握している
大体把握している
少しは把握している
全く把握していない →2-3の質問にお進みください
その他()

- 2-2 2-1で「完全に把握している」「大体把握している」「少しは把握している」を選択した機関にお聞きします。所蔵枚数について教えてください。
() 枚

- 2-3 SPレコード以外の「レコード」について、貴館が所蔵している種類にチェックを入れてください。(複数回答可)
蠟管レコード
LPレコード
EPレコード
SPレコード以外の所蔵はない
その他()

- 2-4 貴館が所蔵するSPレコードの主な来歴について教えてください。
特定少数からの寄贈や購入
不特定多数からの寄贈や購入
不明
その他()

- 2-5 寄贈者名や購入店、寄贈・購入の時期、コレクション形成の過程など、来歴の詳細について教えてください。
※HPや書籍などですでにご紹介いただいている場合は、URLや書籍名などをご紹介ください。

- 2-6 貴館が所蔵するSPレコードのジャンルについて教えてください。
単一のジャンル
複数のジャンル
その他()

- 2-7 ジャンル名やそれぞれの所蔵枚数などについて、お分かりの範囲で教えてください。
※開示可能な集計済みのファイルやデータがあれば、メールに添付してお送りいただいても構いません。

- 2-8 SPレコードの所蔵を今後も増やしていく予定ですか？(複数回答可)

- 寄贈受け入れの予定がある
- 購入の予定がある
- 寄贈の申し出があれば受け入れる
- 寄贈の内容により受け入れる可能性がある
- 受け入れや購入の予定はない
- その他()

3 SPレコードの整理・保管について

※可能であれば、収蔵場所の様子などを写真などで撮影いただきメールに添付してお送りください。

- 3-1 SPレコードの置き方について教えてください。(複数回答可)
縦置き
横置き
その他()

- 3-2 SPレコードのケースについて教えてください。(複数回答可)
紙の袋(スリーブ)に入れている
専用のケースに入れている
何にも入っていない
その他()

- 3-3 SPレコードをどのように整理・分類していますか？(複数回答可)
受け入れ順
ジャンル別
演奏家別
レコード会社別
その他()

- 3-4 SPレコードを収蔵場所している場所について教えてください。(複数回答可)
温度管理をしている
湿度の管理をしている
遮光をしている
特になし
その他()

- 3-5 SPレコードの保管について、困っていること、他の機関に聞いてみたいことなどがあればお聞かせください。

4 SPレコードの目録化および公開について

- 4-1 貴館が所蔵するSPレコードについて、目録化をしていますか？
完了している
進行中
計画段階
予定はない →4-7にお進みください。
その他()

- 4-2 目録化の媒体について教えてください。(複数回答可)
デジタルデータ
紙ベース
その他()

- 4-3 目録化している項目について教えてください。(複数

回答可)

- レーベル（真ん中の紙部分）の情報全て
- レーベル（真ん中の紙部分）の情報の一部
- 原盤番号（マトリクス番号）
- 盤面の写真もしくはスキャンなどの画像データ
- 音声や収録曲などの音声データ
- 調査してデータに加えている項目がある
- その他（ ）

4-4 4-3 で「調査してデータに加えている項目がある」とお答えいただいた方に質問です。
その項目や調査方法などについて教えてください。

4-5 データの公開状況について教えてください。

- 公開している
- 公開に向けて作業をすすめている
- 今後公開する予定がある
- 公開はしていないが研究者等から個別の申請によって提供の場合あり
- 公開はしない
- その他（ ）

4-6 4-5 でデータを「公開している」を選択した機関にお聞きします。
公開の媒体（ネット、書籍など）と、URL や書籍名などを教えてください。

4-7 SP レコードのデータ項目を統一するとともにデータ入力の省力化をめざして、「SP レコードのデータベース統合システム」の可能性を模索しています。このシステムに関心はありますか？

- 非常に関心がある
- やや関心がある
- あまり関心がない →4-9 の質問にお進みください
- まったく関心がない →4-9 の質問にお進みください
- その他（ ）

4-8 4-7 で「非常に関心がある」「やや関心がある」とお答えいただいた方に質問です。
どのような機能が含まれているとよいと思いますか？”

4-9 4-7 で「あまり関心がない」「全く関心がない」とお答えいただいた方に質問です。
その理由についてお聞かせください。

4-10 SP レコードのデータベース化や公開について、困っていることや疑問に思っていること、他の所蔵館に聞いてみたいことなどがあればお聞かせください。

5 SP レコードの活用について

5-1 SP レコードを研究や社会活動などに活用していますか？

- 活用している
- 模索している
- 活用していない →5-4 の質問にお進みください。
- その他（ ）

5-2 SP レコードの活用の方法について教えてください。
（複数回答可）

- レコードコンサート
- 貸出
- 館内視聴

- 研究活動
- その他（ ）

5-3 活用の頻度や内容などについて教えてください。

5-4 蓄音機や SP レコードの再生機を所有していますか？
（複数回答可）

- 蓄音機を所有している
- 電気再生機を所有している
- 必要な時にレンタルしている →5-6 の質問にお進みください
- 所有を検討している →5-6 の質問にお進みください
- 所有していない →5-6 の質問にお進みください
- その他（ ）

5-5 5-4 で再生機を「蓄音機を所有している」「電気再生機を所有している」を選択した機関にお聞きします。どのような再生機を何台所有しているか教えてください。お分かりであれば機種名や型番なども教えてください。また、多数所有している場合は、台数だけでも結構です。
※所蔵カタログやデータベースなどがあれば書籍名や URL を教えてください。写真を添付していただいても結構です。

5-6 SP レコードの活用について、これまでの活用事例や今後の予定や構想、他の所蔵館に聞いてみたいことなどがあればお聞かせください。
とくにコロナ禍の影響などがあれば、教えてください。

6 そのほか

6-1 SP レコードを保管・整理・活用するための人材は十分ですか？

- 十分に確保できている
- 十分とはいえない
- 全く足りていない
- その他（ ）

6-2 SP レコードを保管・整理・活用するための資金は十分ですか？

- 十分に確保できている
- 十分とはいえない
- 全く足りていない
- その他（ ）

6-3 SP レコードを保管・整理・活用するための知識は十分ですか？

- 十分に確保できている
- 十分とはいえない
- 全く足りていない
- その他（ ）

6-4 SP レコードを所蔵するメリットについてお聞かせください。

6-5 SP レコードを所蔵するデメリットについてお聞かせください。

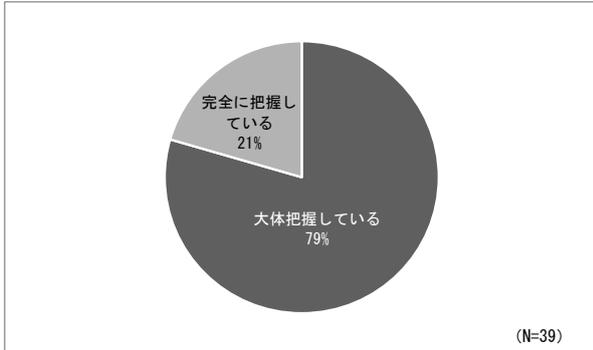
6-6 SP レコードに関することについて、何でも結構ですのでご意見をお聞かせください。
困っていることや疑問に思っていること、今後の課題など何でも結構です。

(資料2)

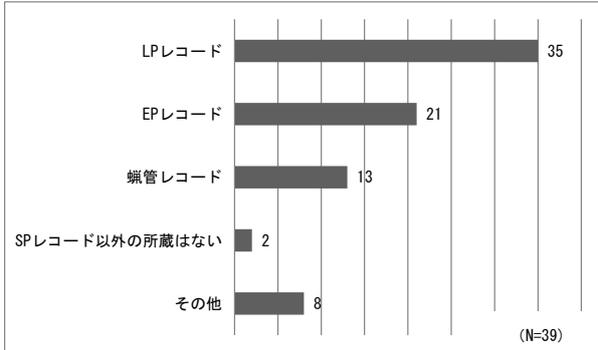
アンケート結果

2 貴館のSPレコードについて

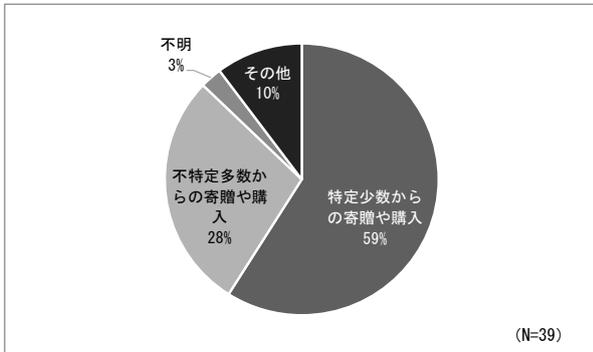
2-1 貴館が所蔵するSPレコードの所蔵枚数の把握状況について教えてください。



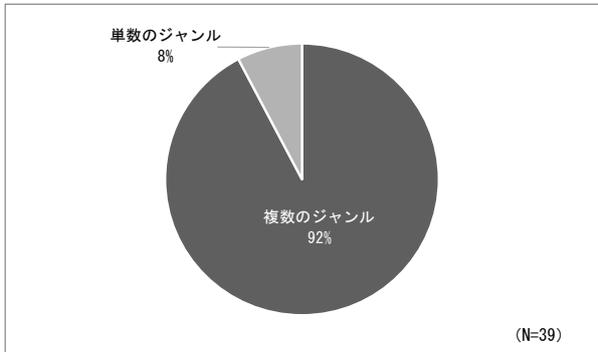
2-3 SPレコード以外のレコードについて、貴館が所蔵している種類にチェックを入れてください。(複数回答可)



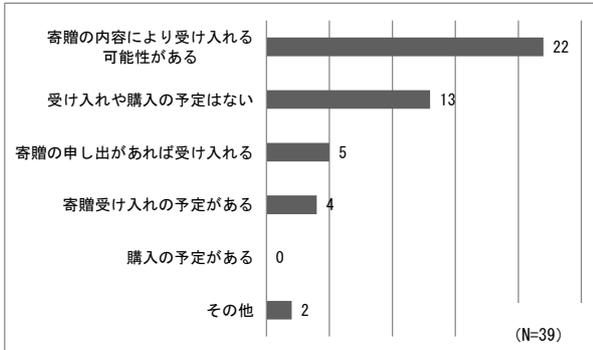
2-4 貴館が所蔵するSPレコードの主な来歴について教えてください。



2-6 貴館が所蔵するSPレコードのジャンルについて教えてください。

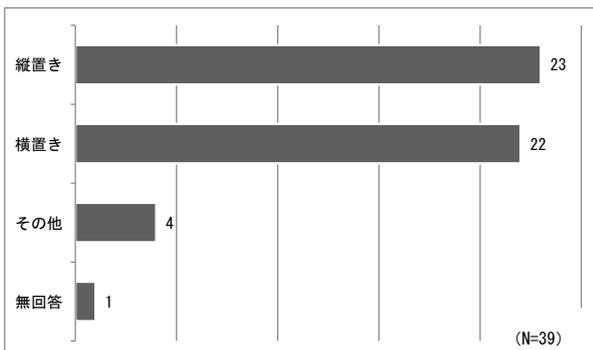


2-8 SPレコードの所蔵を今後も増やしていく予定ですか？(複数回答可)

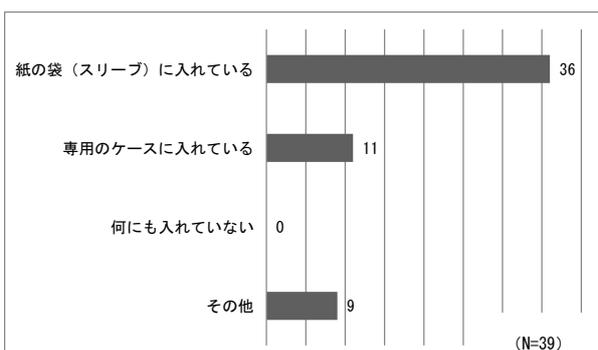


3 SPレコードの整理・保管について

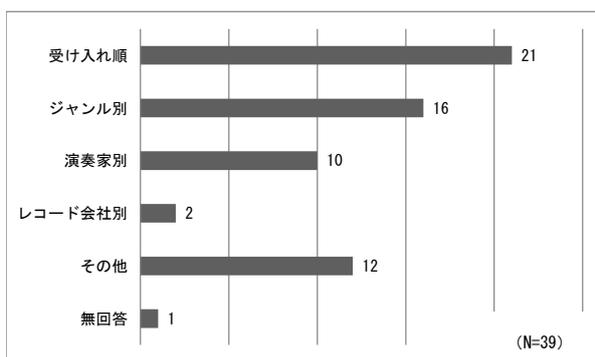
3-1 SPレコードの置き方について教えてください。(複数回答可)



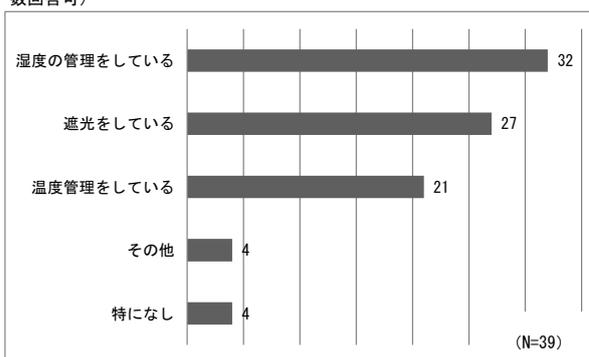
3-2 SPレコードのケースについて教えてください。(複数回答可)



3-3 SPレコードをどのように整理・分類していますか？（複数回答可）

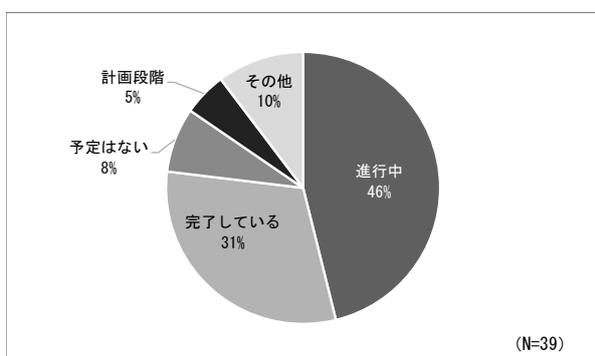


3-4 SPレコードを収蔵場所している場所について教えてください。（複数回答可）

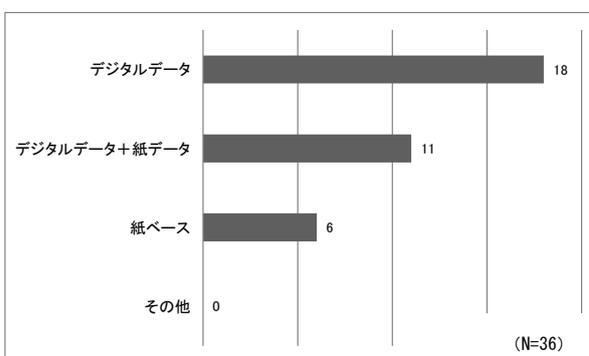


4 SPレコードの目録化および公開について

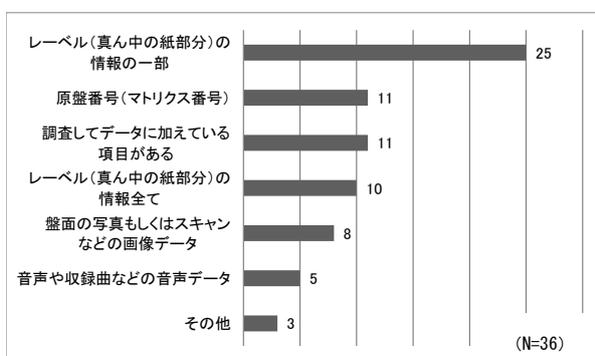
4-1 貴館が所蔵するSPレコードについて、目録化をしていますか？



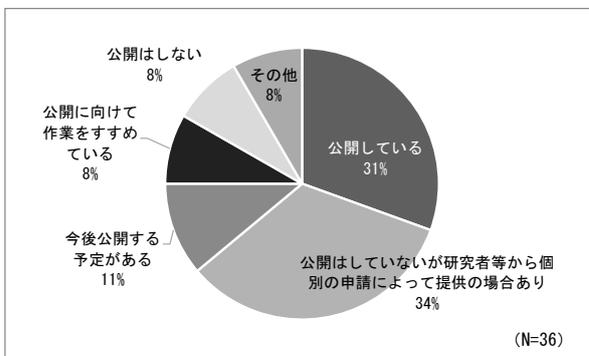
4-2 目録化の媒体について教えてください。（複数回答可）



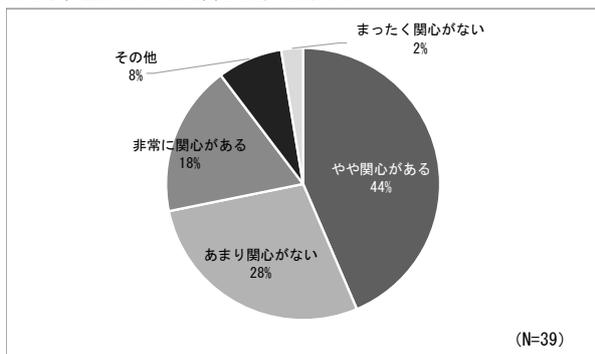
4-3 目録化している項目について教えてください。（複数回答可）



4-5 データの公開状況について教えてください。

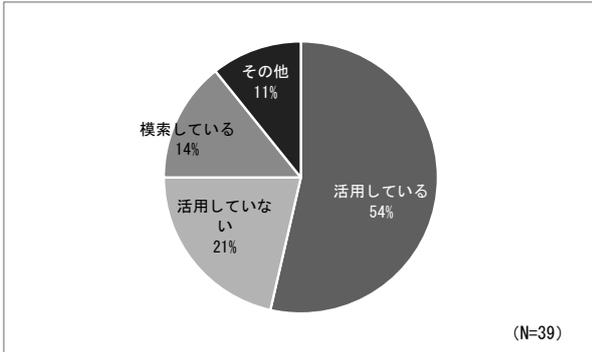


4-7 SPレコードのデータ項目を統一するとともにデータ入力省力化をめざして、「SPレコードのデータベース統合システム」の可能性を模索しています。このシステムに関心はありますか？

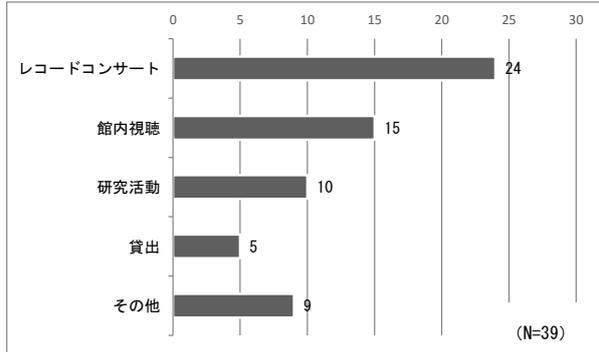


5 SPレコードの活用について

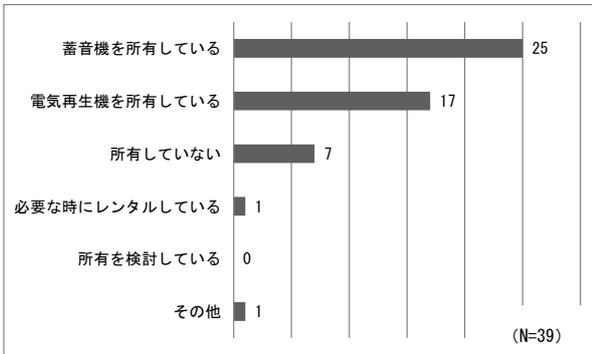
5-1 SPレコードを研究や社会活動などに活用していますか？



5-2 SPレコードの活用方法について教えてください。(複数回答可)

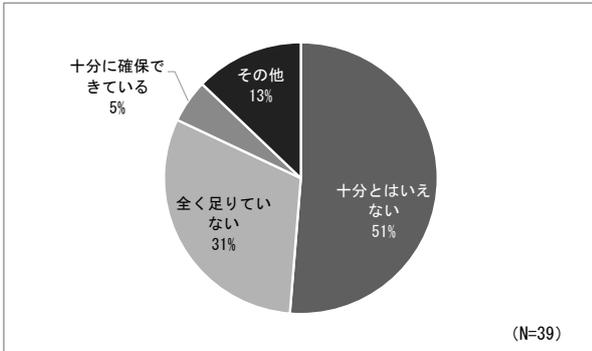


5-4 蓄音機やSPレコードの再生機を所有していますか？(複数回答可)

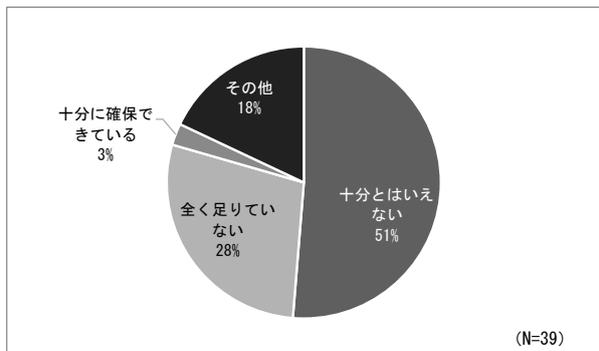


6 そのほか

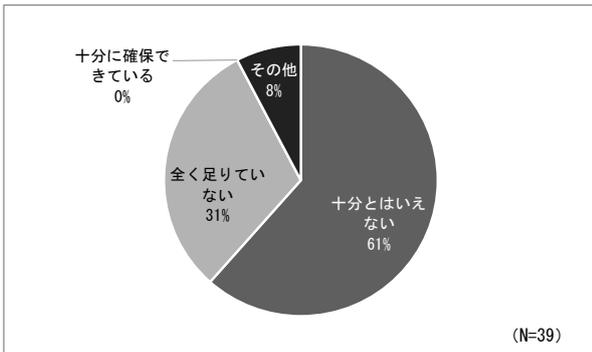
6-1 SPレコードを保管・整理・活用するための人材は十分ですか？



6-2 SPレコードを保管・整理・活用するための資金は十分ですか？



6-3 SPレコードを保管・整理・活用するための知識は十分ですか？



Inheriting and utilising 78records based on a national collection institution survey

Mariko OKUBO¹⁾, Misako MISHIMA¹⁾, Tomoaki YANAGI²⁾

¹⁾ The Kyushu University Museum

²⁾ Former Osaka University of Arts Museum

This paper clarifies the actual situations of, and issues faced by, institutions holding 78records based on Japan's first national survey of such institutions. Moreover, it aims to describe the characteristics of Kyushu University Museum's collection of approximately 40,000 78records. In addition to proposing future activity development regarding domestic 78records, this paper presents measures for promoting cooperation between collection institutions and more active record utilisation.

Key words: 78record, Network of Historical Recordings Collection, gramophone, Satoshi TAMURA, Database

